

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15-3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第 90 号 2017. 1. 25
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所

〒107-0052
東京都港区赤坂 9-6-29-309
音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058

第 30 回定例総会&お茶の会報告

2016 年 10 月 29 日(土)14 時 30 分から、北海道大学クラーク会館 3F 国際文化交流活動室において、第 30 回定例総会が開催されました。会員 17 人が出席し、塚本智宏さんの議長で、所定の議案はすべて承認されました。

つづいてお茶の会にはポーランド人 6 人を含めて 25 人が参加し、ケーキ・チーズ・お茶とポーランド人差し入れのワインで賑やかに歓談しました。

写真撮影のあと岩手県在住の作家・翻訳家の田村和子さんから贈られた紙芝居「わたしはテイコです」(絵 児玉智江)が熊谷敬子さんとラファウ・ジェプカさんの朗読で披露され、みんな棒付きキャンディをなめなめ童心に戻りました。

ついで世界伝統空手道連盟から「生涯大使」の称号を与えられた霜田千代磨さんのスライド付きの報告、最後に尾形芳秀さん撮影の、さっぽろ雪まつりに参加したポーランド雪像チームと、遠藤郁子さんが出演した東京例会のスライドショーと、和やかで温かい雰囲気になりました。(小林暁子)

「わたしはテイコ」を読んで

さあ、紙芝居がはじまるよ。
坊っちゃん、嬢ちゃん、集まって
待っている子にはアメをあげるよ

事務局の小林さんが、やるからには思いっきり楽しみましょうとばかり、ペコちゃんの棒付きアメの大袋を差し出して、始まる前に配りましょうと援護して下さいました。そんなこんなで怖いもの知らずの紙芝居の“オネエサン”が紳士淑女の皆様を前に無礼講の口上をのべての始まり、始まり……

物語は一枚毎に私の日本語のあとラファラさんがポーランド語で語ります。秒速よりさらに小刻みなポーランド語は唇、舌の最速の振動で、時々心情を吐露する表現などが豊かに伝わって来ました。

紙芝居のストーリーは前号で作者の田村さんによるご紹介もありましたので割愛しますが、手作りの温かな紙の風合いや、彩りのやさしい感性が悲劇をよりクローズアップするように伝わってきます。「忘れないでください」と叫ぶテイコ人形の言葉は、犠牲となったカミラさんや膨大な数の民族の声を代弁して強く心に響きました。

ポーランド語のシャワーを存分に浴びながらの紙芝居は滅多に経験出来るものではなく、内容面からも奥深い企画だったと思います。学生時代に強制収容所にまつわるものをむさぼり読んだことが急に甦って、源泉に立ち返るよう自分を意識できた気がします。今後の協会の活動がまたどんな出会いと学びをもたらすか期待が膨らんでいます。

以上、熊谷敬子でした。



(左) M・ジェプカ、小笠原正明、R・ジェプカ、(中左) R・ジェプカ、J・ヴィシュコフスカ、R・コムダ、坂田朋優、安藤むつみのみなさん、(中右) 紙芝居「わたしはテイコです」の上演(朗読 ラファウ・ジェプカ、熊谷敬子)と(右) 展示

第 30 回定例総会議案

(議長 塚本智宏)

第 1 号議案 2016 年度(2015.10-2016.8)活動報告
について(報告 小林暁子)

1. 《第 29 回定例総会・『創立 25 周年記念誌』出版
祝賀会》、2015 年 10 月 17 日(土)総会 16:00～、
祝賀会 17:15～20:00、ホテル札幌ガーデンパレ
ス 4F 真珠の間、参加者:総会 18 人、懇親会・日
本人 32 人、ポーランド人と家族 25 人、来賓:ポ
ーランド広報文化センター・ミロスワフ・ブワシチャ
ック所長
2. 例会
 - (1)《第 74 回例会》講演会:久山宏一:ポーランド映画
『灰とダイヤモンド』の成立と受容、2016 年 2 月 5
日(金)18:30～20:30、札幌エルプラザ 4F 中研
修室、共催:ポーランド広報文化センター、参加
者約 40 人
 - (2)《第 75 回例会》講演会:新井藤子:ピウスツキと日
本、北海道、先住民族～2020 年東京五輪までに
意識しておきたい人物史、2016 年 2 月 20 日(土)
14:00～16:00、札幌エルプラザ 4F 中研修室、参
加者約 30 人
 - (3)《第 76 回例会》朗読とお茶の会:午後のポエジア 6、
出演:斎田道子、レナタ・シャレック、小林暁子、ミ
ハリナ・ミコワイチャック、若松雅迪、熊谷敬子、斉
藤征義、松永吉史、菅原みえ子、長屋のり子、ラ
ファウ・ジェプカ、浅井雄介、バルバラ数井、花季
汀蘭、霜田千代麿、福原光篠、河村恵李アンナ&
明希カリナ、ミコワイ・ジェプカと仲間たち、ヨアン
ナ・ヴィシュコフスカ、2016 年 6 月 4 日(土)14:00
～18:00、北大クラーク会館 3F 国際文化交流活
動室、共催:ポーランド広報文化センター、参加
者約 60 人
 - (4)《第 77 回例会》(第 2 回東京例会)遠藤郁子ピアノリ

サイタル:シヨパンと私とポーランド、2016 年 6 月 23
日(木)18:30～、レセプション 20:00～21:00、駐日
ポーランド共和国大使館ホール、共催:ポーランド
広報文化センター、参加者約 100 人、来賓:ツイ
リル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国大使

3. 会誌「ポーレ」第 87 号(2016 年 1 月 15 日)、第
88 号(4 月 25 日)発行
4. 運営委員会:2016 年度(1)2015 年 10 月 2 日、
(2)11 月 30 日、(3)2016 年 1 月 25 日、(4)3 月
30 日、(5)6 月 6 日、(6)8 月 22 日
5. 後援/共催等事業
 - (1)〈後援〉ポーランド映画祭 2015 in 札幌、2016 年
2 月 6 日(土)11:00～開幕挨拶:ポーランド広報
文化センター所長ミロスワフ・ブワシチャック、上映
作品:『エヴァは眠りたい』1957 タデウシュ・フミ
レフスキ監督、『約束の土地』1974 アンジェイ・ワ
イダ監督、『ヴァバンク』1981 ユリウシュ・マフルス
キ監督、札幌プラザ 2・5、主催:ポーランド広報文
化センターほか
 - (2)〈共催〉第 67 回さっぽろ雪まつり第 43 回国際雪像
コンクールにポーランド、シュラルスカ・ポレンバ
市の「ヤロメリ」チームが再挑戦、2016 年 2 月 4
日(木)～8 日(月)、大通西 11 丁目国際広場、主
催:駐日ポーランド共和国大使館
 - (3)〈後援〉NPO 法人まざるか北海道第 5 回東日本
大震災被災者支援コンサート「私たちは忘れない!」、
ピアノ演奏:遠藤郁子、2016 年 3 月 6 日(日)
14:46～、光塩学園 koen 天秘ホール
 - (4)〈後援〉l'amitié ラミティエ～保育者・教員養成校
教員有志によるコンサート、2016 年 3 月 21 日(月)
13:30～、六花亭札幌本店 6F ふきのとうホール
 - (5)〈後援〉北大祭 IFF2016 ポーランド料理テント



(左・前列) 小林暁子、小笠原正明、霜田千代麿、安藤厚、川染雅嗣、富山信夫、井上紘一

(右上) 塚本智宏総会議長、(右下) 小林暁子事務局長、佐々木保子会計担当

(写真 松山敏)

“Polski Namiot”、2016年6月2日(木)～5日(日)9:00～21:00、北大総合博物館付近、主催：北海道大学ポーランド人留学生会、協賛：ポーランド広報文化センター

(参考)2016年度の会員の動向：入会6人、退会6人。会員数：88人(2016.8.31現在)

第2号議案 2016年度収支決算報告について(別紙のとおり)(報告 佐々木保子)

第3号議案 2017年度(2016.9-2017.8)活動計画について(提案 小林暁子)

1. 《第30回定例総会・お茶の会》、2016年10月29日(土)総会 14:30～・お茶会 15:30～、北大クラーク会館 3F 国際文化交流活動室
2. 《第78回例会》レクチャーコンサート：ショパンとバロックの精神～スティル・ブリゼの応用を通して、出演：加藤一郎、久保田友、國谷聖香、坂田朋優、長崎結美、田口綾子、2016年10月2日(日)13:30～、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール
3. 《第79回例会》アンジェイ・ワイダ監督を偲んで、お話：中島洋、ビデオ上映『地下水道』『灰とダイヤモンド』、2016年12月5日(月)18:00～22:00、札幌エルプラザ 4F 大研修室
4. 朗読会：午後のポエジア 7、2017年6月頃
5. 会誌「ポーレ」第89号(2016年9月1日)、第90号(2017年1月)、第91号(同5月)発行
6. オンライン広報の強化

第4号議案 2017年度予算(案)について(別紙のとおり)(報告 佐々木保子)

第5号議案 2017年度役員等案について(提案 小林暁子)

(会則第6条に基づく役員) 新任

会 長：安藤厚

副 会 長：小笠原正明、霜田千代磨

運営委員：新井藤子、安藤むつみ、薄井豊美、越野剛、小林美保、佐々木保子、霜田英麿、園部真幸、高橋健一郎、塚本智宏、富山信夫、中島洋、松井亜樹、アグニェシュカ・ポヒワ、ラファウ・ジェプカ

事務局長：小林暁子

監査委員：齋田道子、野村信史

(会則第15条に基づく事務局、会誌編集委員会および部会)

事務局：(事務局長)小林暁子、(会計)佐々木保子、(副事務局長・広報)越野剛、(渉外)ラファウ・ジェプカ
会誌編集委員会：熊谷敬子、越野剛、塚本智宏、松山敏、ラファウ・ジェプカ

(会則第16条に基づく東京事務所)

東京事務所：(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ

第6号議案 会則および、会費についての細則の改正について(2016年10月29日改訂)(提案 安藤厚)

【会則の改正】

第17条 〈…〉2017年度(2016.9.1-2017.8.31) 主な役員は以下の通りとする。

監査委員 齋田道子、野村信史

【会費についての細則の改正】

削除

2. 本会の会計年度は毎年9月1日にはじまり、8月31日におわる。ただし、~~2016~~会計年度は~~2015~~年10月1日にはじまり、~~2016~~年8月31日におわる。(ただし書きは、~~2016~~年9月以降削除する。)

総会出席会員 17人、全議案が承認されました。

《第78回例会》報告 レクチャーコンサート：ショパンとバロックの精神～スティル・ブリゼの応用を通して、2016年10月2日(日)13:30～、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール

加藤一郎先生を迎えて

このたび、国立音楽大学の加藤一郎准教授をお招きして、レクチャーコンサートを開催しました。加藤先生はたいへん素晴らしいピアニストですが、ショパンに関する著作、論文を沢山書かれている研究者でもあり、今回はスティル・ブリゼ(Style brisé)の技法に焦点を当てて講演していただきました。

当日は、以前から加藤先生とご親交のあった熊谷玲子、高岡立子両先生をはじめ札幌大谷大学・同短期大学部の先生方にも多数お越しいたいただき、小さな会場に約70人もの大勢の方にご来場いた

だきまして心からお礼申し上げます。

演奏者の皆様、当日お手伝いいただきました運営委員の皆様、また岡本孝慈先生にはたいへんお力添えを賜りまして、心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。(松井亜樹)



(左) 安藤厚、長崎結美、加藤一郎、久保田友、國谷聖香、田口綾子、坂田朋優、松井亜樹の各氏(写真 松山敏)

ショパンとバロックの精神～スティル・ブリゼの応用を通して

加藤 一郎

ショパンの音楽はしばしばポーランド民族音楽やオペラとの関わりや、彼の生涯との関わりから論じられます。しかし今回は、ショパンの音楽とバロック音楽の技法や美学との強い関連性について、スティル・ブリゼの応用を通してお話し、北海道在住の5名のピアニストと共に演奏させて頂く貴重な機会を得ました。この機会を与えて下さった北海道ポーランド文化協会の皆さま、そして当日ご清聴頂いた皆さまには心から感謝を申し上げます。

1. ワルシャワ時代のショパン

ショパンがその音楽の形成期を過ごしたワルシャワ時代(1810-31)、彼が先ずヴォイチェフ・ジヴニー Wojciech Żywny からピアノを習い始めたことは良く知られています。ジヴニーはチェコ出身の音楽家で、バッハを深く信奉していました。彼がショパンにどのような教育を行なったかは良く分かっていません。ショパンはその後、ワルシャワ王立大学附属中央音楽学校(現ショパン音楽大学)でユゼフ・エルスネル Józef Elsner から、J.S.バッハの弟子のヨハン・フィリップ・キルンベルガー Johann Philipp Kirnberger の理論書『純正作曲の技法』(1774-79)に基づいて対位法を学びました。そうした古い音楽理論をショパンが全く抵抗なく受け入れたかどうかは別として、彼の音楽学校時代の作品には模倣対位法やラメントバスが用いられており、彼がエルスネルに対して深い敬愛の念を抱いていたことは、彼がパリ時代にエルスネルに宛てた手紙からも

明らかです。ショパンはワルシャワ時代、当時のヨーロッパとしても古典的な音楽を学び、自らの美学の基礎を身に付けて行ったと言えます。

2. スティル・ブリゼとは

こうした古い音楽様式の中にスティル・ブリゼ Style brisé(打ち砕かれた様式)という技法がありました。これは17世紀のフランスのリュート音楽で生まれた分散奏法で、優美で即興的な趣味に富む技法でした。当時のリュート奏者、エヌモン・ゴティエの〈クーラントとドゥーブル〉(譜例1)を見ると、この技法が〈ドゥーブル〉の方に如実に示されているのが分かります。〈ドゥーブル〉は〈クーラント〉をこの技法で変奏していますが、その際、八分音符のリズムで和音を分散し、その中で旋律的な流れを作り、八分音符が和音と旋律の橋渡しのような働きをしています。また和声音が保続されたり、異なる声部が互い違いに動くこともこの技法の特徴となっています。この技法は直ぐにフランスのクラヴサン音楽にも取り入れられ、ドイツやイギリスにも伝播しました。ショパンはバッハやクレメンティ等の作品を通してこの技法を用いるようになったと考えられています。

3. ショパンによるスティル・ブリゼの様式化

ショパンはこの技法を、a 和音を低音から順次分散して奏する単純な方法でも用いましたが、b 和音を旋律で彩の様に分散する方法や(譜例2)、c 複数声部を対位的に呼応させる方法(《夜想曲》変

譜例1 エヌモン・ゴティエ 〈クーラントとドゥーブル〉より a クーラント、b ドゥーブル

譜例2 ショパン 《ソナタ》 口短調 作品58 第1楽章

ニ長調作品 27-2 第 71-74 小節等)で用いることもありました。a はあくまでも和音を音楽の主体とし、音楽の垂直的構造が優位となります。しかし、b になると旋律の役割が増し、和音を分散する音型がその箇所の音楽的性格に影響を与えるようになります。そして、c は和音を分散する音型が主体となり、音楽の水平的構造が優位になります。

こうしたことは、ショパンがバロック期のリュート音楽で生まれたこの技法を自らの音楽の中で多様な方法で様式化していったことを示しています。音楽は時代や地域を越え、伝播と受容の歴史を築いていますが、その一コマ一コマに個々の音楽家ならではの美学の探究が込められていると言えます。(かとう いちろう)

《第 79 回例会》報告

アンジェイ・ワイダ監督を偲んで

お話: 中島洋(シアターキノ代表)、ビデオ上映:『地下水道』(1957)『灰とダイヤモンド』(1958)、2016年12月5日(月)18:00~22:00、札幌エルプラザ 4F 大研修室



ポーランド映画を代表するアンジェイ・ワイダ監督が10月9日ワルシャワで亡くなりました。監督を偲んで例会を企画したところ、寒い中、会員を中心に25名の方々にご参加いただきました。

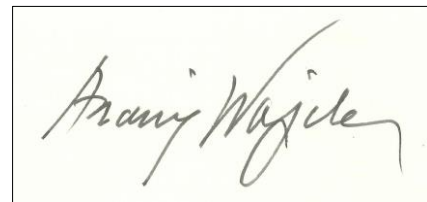
最初に中島洋さんによる作品解説が20分少々あり、ご自身の映画体験を交えて熱く語っていただきました(《追悼特集》を参照)。中でも『灰とダイヤモンド』の有名な2シーンについて「映像表現の普遍性」という観点からわかりやすく解説され、とても興味深く聞きました。中島さんにはぜひまた別の機会にゆっくりとお話を聞きたいと思います。

つづいて『地下水道』と『灰とダイヤモンド』を連続上映、会場使用時間ぎりぎりに終了しました。今回は元会員の藤平隆さん(池田町)*ご寄贈のポーランド映画 VHS ビデオテープ 9 本の中から選びました。大画面で見る画質に不安もありましたが、思ったよ

り鮮明な画像で会場の音響もまざまざでした。

会場アンケートには「熱烈な反戦映画。今日もどこかで争っているが、人間は戦う生き物かの思いです」「新会員として今日ここに来ました。愛はダイヤモンド、生きるはダイヤモンド」などの声がありました。ご参加の皆さまには感謝申し上げます。(園部真幸)

*藤平さんは12月13日に逝去されました。合掌。形見となったテープの活用法を考えたいと思います(小林)。



クラクフの Manggha Center の日本祭(1995.3.18)で思いがけずワイダ監督にサインを買った! (安藤瞬)

《アンジェイ・ワイダ監督追悼特集》

アンジェイ・ワイダ追悼

三浦 洋

ポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダが10月9日にワルシャワで逝去しました。第一次世界大戦後、ポーランド独立回復の8年後の1926年、ポーランド東北部のスヴァウキに生まれ、祖国の歴史と文化に殉じるように生きた90年と7カ月でした。

ワイダはまだ20代の若さで『世代』(1955)でデビュー。映画監督として活動した約60年間に残した長編30作・短編20作余りのうち、原点といえる「抵抗三部作」——50年代の『世代』『地下水道』『灰とダイヤモンド』——の代表作としての地位は揺らがないでしょう。一説によれば、日本で自主上映運動が広

がったのは抵抗三部作の上映がきっかけだったそうです。1949年生まれの作家、村上春樹が長編第一作の『風の歌を聴け』(1979)で主人公の「僕」に「(米国の「最後の西部劇監督」)ペキンパー以外の映画では、僕は『灰とダイヤモンド』が好きだ」と語らせているのは、この世代の関心を象徴的に表しているのかもしれない。

この作品については、本会の講演会「『灰とダイヤモンド』の成立と受容」(第74回例会、2016.2.5)で久山宏一先生(ポーランド広報文化センター)がくわしく解説されました。久山先生は2016年6月5~6日にクラクフで開催された「ワイダの90年」という学会で「日本から見たアンジェイ・ワイダ」と題して発表され巨匠との再会も果たされたので、それから4カ月後の訃報にはさぞかし驚かれたことでしょう。



私は久山先生からワイダが間もなく新作を発表すると伺っていましたが、訃報に接したとき、にはわかには信じられません。遺作となった新作(原題『残像』)は政治的抑圧に抗したポーランドの前衛画家が主人公で、本年6月に日本公開が予定されています。

「抵抗三部作」に劣らず著名なのは自主管理労組「連帯」の運動を描いた『鉄の男』(1981)と、その前駆的作品の『大理石の男』(1977)でしょう。「連帯」運動から東欧革命にいたる一連の政治変動は1980年代の日本で盛んに報道され、本協会が産声を上げる背景にもなりました。

1987年、監督は「ポーランドの激動の歴史をみつめ、人間の自由と勇気、尊厳のあり方を表現し、世界に大きな影響を与えた」という理由で「京都賞」を受賞。もともと若き日に浮世絵(ヤシエンスキ・コレクション)など日本美術に傾倒した知日家で、クラクフに日本美術技術センターManggha Centerを設立する構想を1994年11月に実現させました。

ワイダ最大の功績は何かと考えると、旧ソ連とポーランドの歴史的問題を扱った『カティンの森』(2007)に加え、アダム・ミツキェヴィチ『パン・タデウシュ』の映画化は外せないでしょう。バチカンで『パン・タデウシュ物語』(1999)を見たヨハネ・パウロⅡ世がワイダに「ミツキェヴィチさんがどんなに喜ぶでしょうか」と語った言葉がすべてを物語っています。

かつてワイダはショパンを「感情さえ論理化しないではいかなかった音楽家」と評しましたが、この評は、深く感情に訴える主題を据えながら、感情に流されない映像を撮り続けたワイダ自身にもあてはまります。周辺の三国による分割でポーランドが消滅して15年後に生まれたショパンと、独立回復後も苦難の歴史を歩んだポーランドに生きたワイダは、自らの芸術作品を通じ祖国の激動の同時代史に殉じるようにして生きた点で、大変似ていると思います。『灰とダイヤモンド』の中で主人公のマチェク(ズビグニェフ・ツィブルスキ)がつぶやく「報われぬ祖国への愛の記念に」という印象的な台詞は、濃厚な「祖国への愛」の逆説的な表現です。ワイダとショパンはそれを体現したゆえに世界に名を馳せたといえるでしょう。(みうら ひろし)

さようなら、ワイダ監督

佐藤 晃一

2015年にポーランドへ行った際、ワルシャワを

案内してくれた女性と話をした。彼女は広島へ留学していたと言っていた。彼女に「ワイダは元気ですか」と尋ねたところ、「元気ですよ」という答が返ってきた。映画監督はそこそこ長命なので、まだまだ新作を観せて貰えると思った。

2016年2月の「ポーランド映画祭2015 in 札幌」ではワイダの『約束の土地』(1974)を観ることができたし、久山宏一氏の『灰とダイヤモンド』に関する講演は私に深い感銘を与えた。

私のワイダのベスト1は『カティンの森』。父親の体験も描かれた、第二次世界大戦告発の力作と思う。遺作の『残像』(原題)は2017年6月に日本での上映も決まった(東京・岩波ホール)。そのうち北海道でも観ることができるだろう。最近、イエジー・スコモリスキ(78歳)の新作『イレブン・ミニッツ』(2015)を観たが、大変面白かった。まだまだポーランド映画界も元気なようだ。合掌。(さとう こういち)

灰とダイヤモンド～永遠の青春映画

園部 真幸

反ソ派テロリストのマチェクが労働者党幹部のシチューカを暗殺するまでを描いた『灰とダイヤモンド』は、『世代』『地下水道』と共にワイダ監督の抵抗三部作の一つとされるが、私は青春映画の最高傑作に位置付けたい。わずか一晩の恋の物語をこれほどまでに緊張感溢れる映像として描き切った作品がほかにあるだろうか。

刹那的な恋に説得力を持たせているのは、クリスティーナとの恋がマチェクに抜き差しならない選択を迫っているためだ。背景にはポーランドの過酷な時代状況がある。映画には終戦の日に様々な思いで「戦後」を生きようとする人々が登場する。しかし、数世紀にわたって大国の利害に翻弄され、多大な犠牲を払った蜂起によっても報われることなかったポーランド民衆の心の傷は深い。

そうした人々の喪失感を象徴するように、映画には「無意味」という言葉が印象的な場面で二度出てくる。一つはベッドの中で頬を撫でようとするマチェクに対してクリスティーナが言う。もう一つは上官のアンジェイに暗殺の決断を迫られたマチェクが「一切を信じるのか」と問う場面で、アンジェイは問い自体「無意味だ」と答える。

マチェクはクリスティーナとの出会いをきっかけに「普通の生き方」を選択しようとして悩む。クリスティーナもまたマチェクが「予定」を変更することに微かな希望を見つけようとする。しかし、アンジェイの言うように問うこと自体が無意味であるのなら、もは

や彼に選択の余地はなかった。マチェックはほとんど無意味にシチューカを暗殺し、ゴミ捨て場で悶え死んでしまう。

クライマックスのシチューカ暗殺からエンディングまでの映像は実に見事で印象的だ。シチューカを抱えるマチェックの背後に戦勝を祝う花火が上がるシーン、彼が去ったあと窓から差し込む朝の日差しを受けてクリスティーナが立ちすくむシーン、そして何よりもクリスティーナの目から零れ落ちる涙……

(そのべ まさき)

永遠の勝利の暁の幻影

松山 敏

私が毎週日曜日に欠かさず通る、新川 ITC から江別西 ITC に向う道で、家並から遠のくにつれて私の想いを確実に不安に陥れる光景が飛び込む。それは「MATEC」と大きく書かれたサインのある大規模な産業廃棄物堆積場で、わずか 5 秒で過ぎ去るが、高速道路を降りるまでの数分間、ハンドルを握りながら私の目は虚空の低い雲を追っている。

持てるものは失わるべきさだめにあるを
残るはただ灰と嵐のごとく深淵に落ちゆく混迷のみなるを
永遠の勝利の暁に灰の底深く
燦然たるダイヤモンドの残らんことを……

(ポーランドの詩人ノルビッドの甲詩)

人が誰かと比べて長生きしたからといって、どのような嗣業であったと言えるのか？ また人が誰かと比べて早く死んだからといって、どのような罪があったと言えるのか？

マチェックは、赤々と燃え盛る生の鼓動の美しさを、ほんの死の直前に聴いた。純白に洗われ、まだ乾ききらぬ布のごとく、終戦で新しくされた世が訪れた瞬間に、マチェックは弾丸を浴びて倒れる。その時彼の目に飛び込んだ光景は何だったのか。

今日もまた、産廃の堆積場と「マテック」のサインを横目で見ながら教会に向けて車を走らせる者がいる。昨日までは人から愛され貴ばれてきた宝が、人に捨てられた瞬間から邪魔にされる廃棄物と化し、私たちは捨てられるべき物を着、捨てられるべき物の上



の上に住み、まさに「持てるものは失わるべきさだめにある」

世にあつて、今日も朽ちることのない何かを執拗に追い求め続けながら生きている。この不安感。やはり私も塵芥(灰)の底深くに埋め殺されたダイヤモンドに再び光があてられて輝く日を待ち望む「マチェック」の一人なのであろう。

マチェックの見据えたもの、19 世紀を生きたノルビッドが見据えたもの、そして私たちが見据えているもの、それは「永遠の勝利の暁」として多くの書に記されている秘義が成就するとき、つまり世の末に起こる復活の希望の幻に違いない。

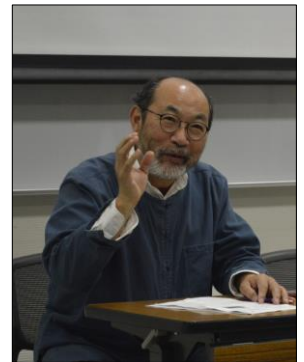
同じくノルビッドが「ショパンは野原に落とした農民の涙をダイヤモンドに変えた」と謳った意味は、世の中に起こる復活の幻をショパンという人が音楽という言葉を用いて証し、人種と国境を越えて人々全てに予見させてくれているということだろう。ワイダの映画、ショパンの音楽、ノルビッドの詩、これら全てのアートの行為は、全人類に「永遠の勝利の暁の幻」を予見させる手段である。またそれらはこの世にあつてこそ、赤々と官能的に燃え盛る血流の如くに美しくきらめき響く。

そして今、アンジェイ・ワイダ監督ご自身も文字通りのダイヤモンドとなって先発たれ、再び栄光を浴びて輝く日を静かに待っている。(まつやま さとし)

抵抗三部作は今も生きている

シアターキノ代表 中島 洋

映画を、監督を意識して見るようになった 20 代前半の頃、強い関心を持ったのは戦後まもなくのヨーロッパ映画の動き、イタリアのネオリアリズム、フランスのヌーベルヴァーグ、そしてポーランド派だった。特にワイダ監督の『地下水道』と『灰とダイヤモンド』は衝撃で、強く記憶に残っている。



ワイダ監督のインタビューを読んだり、この時代の映画を少しかじってみたりして、今思うことはポーランド派にとっての戦争体験の大きさだ。ドイツとソ連の不可侵条約で二分されたポーランドは、当時 3000 万人足らずの人口で、500 万人もの犠牲者を生んでいる。ワイダ達は最大の破壊行為である戦争の体験を後世に伝えることは義務とまで言い切っているが、同時に「私の青春を奪い取った」ことへの強い怒りがあることは重要だ。

30 歳前に撮った『世代』から『地下水道』『灰とダ

『イヤモンド』は抵抗三部作と言われるが、その抵抗には善と悪、加害者 VS 被害者という安易な図式や、ヒーローを称えるようなロマンチズムは全くない。「何よりも渾身の力をこめた自己切開の呻きがあり、体験の意味を主体的に問い詰める意識があった」(松本俊夫)。ポーランドの人々の湧き上がる抵抗の純粋なエネルギーが、政治指導の混乱と誤謬によっていかに引き裂かれたかをあぶり出したのだ。

だが、メッセージだけが優れているのではない。映画は常に「何を描くか」と「どう描くか」の両方がある。こそこそ素晴らしい作品が生まれると思うが、ワイダ達ポーランド派は、その映像表現もまた戦後映画に決定的な影響を与えることになる。

映像ならではの表現を、ワイダは『灰とダイヤモンド』を例にして語る。「主人公のマチェックが、共産党の要人を暗殺した時に、のけぞって倒れるのではなく、マチェックに抱かれるようにして倒れる。ここには、同じ言葉を話す同胞なのに、敵味方に別れてしまった、その責任はどこにあるのか」と。直接的な反ソの表現を避けつつも、世界の人々に伝わる普遍性を獲得したのだ。

もう一つの例は、当時の政府の検閲に関するものだ。マチェックは最後にゴミ捨て場で死ぬが、検閲官は「テロリストだから、こんな無残な死に方をして当然だから上映していい」と言った。しかし、世界の多くの観客は、マチェックを死に至らしめた背景、その体制は何であるのかを見つめたのだ。これはどちらにも解釈できるが、世界にマチェックのファンが生まれ、その精神は今も引き継がれている。

(なかじま よう)

※遺作となった『残像』は、文化の全体主義に抗して戦った画家ストウシェンスキの生涯が描かれ、抵抗三部作から培ってきたワイダ監督の原点が変わっていないことを物語っているようで、大変楽しみです。6月か7月ごろシアターキノで公開します。

ワイダと演劇

津田 晃岐

映画監督アンジェイ・ワイダは、実は斬新な演劇家でもあった。日本でもワイダ演出の『ハムレット IV』



(東京グローブ座、1990)の衝撃を覚えている人は少なくないようだ。主人公を女優が演じただけでなく、観客が見るのは楽屋で苦悩する俳優と、その奥の舞台上で演じられている『ハムレット』の一部のみという、メタ演劇的

要素に「人間と演技」といった心理学的テーマを絡めた野心作だった。その公演に興味を持った演劇関係者から芝居台本の翻訳を頼まれたのが、私とワイダ演劇との最初の出会いだった。

ポーランド語の台本は、従来の翻訳より自然なスタニスワフ・バランチャク(1946-2014)の新訳を、さらに自然な形に切り貼りしたものだった。そこで、バランチャクのポーランド語訳とワイダの台本、そして小田島雄志訳の『ハムレット』とをにらみ比べながら「第四の翻訳」を継ぎ合わせていく作業となった。

もう一つワイダと演劇で思い出すのは、彼が1976年に映像化したタデウシュ・カントル(1915-90)の『死の教室』だ。既に世界的名声を得ていたワイダがカントルの下に就くことにしたのは「この驚異的な芝居をフィルムに永遠に焼きつきたい」という衝動に駆られたからだ。その後の経過は「惨憺たるもの」だったと回想する¹。

一方、カントルは同時代の芸術家に言及すること自体が珍しく、ワイダの『死の教室』についても一度触れたきりで、しかも「この芝居の最良の記録」としては別人の記録映像を挙げ「でもやはり芝居の真の記録化は不可能だと思う」と言っている²。

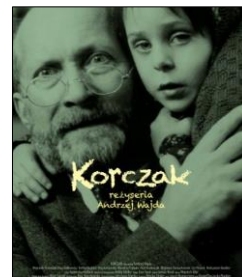
噛み合わなかった二人だが、彼らの合作である映画『死の教室』が最近デジタル化され市販された。こうして、二人の天才の共同演出が永遠に残ることになった。(つだ てるみち)

- 1 アンジェイ・ワイダ『死の教室』映画化の舞台裏 坂倉千鶴訳、『ポロニカ』2 (1991)、63-65
- 2 Tadeusz Kantor, *Trafic do światowego muzeum...*, [w:] Pisma, t. 2: "Teatr Śmierci" — Teksty z lat 1975-1984, Ossolineum i Cricoteka, Wrocław i Kraków 2004, s. 451-455.

ワイダ監督の『コルチャック先生』

塚本 智宏

私がコルチャックに関心を持ったのは1990年、ワイダ監督の『コルチャック先生』を見てからである。体制転換の1989年は、国連子どもの権利条約が採択され、世界の子ども史上に画期をなした年でもある。当時私はロシアの1917年の急進主義的自由主義者の“子どもの権利宣言”について1989年条約との関係を意識して研究を始め、この条約の提案国であるポーランドにも関心を持ち、条約の歴史的起源に第二次世界大戦での大量の子ども



犠牲者があったことを知り短い論文を書いた。

こんな人物がいたとは…観賞前、急ぎ予習し主人公について多少は知っていたが、映画の中で次々と悲劇と「試練」がコルチャックの周囲に起こり、彼と子ども達を「最後の行進」へと追い込んで行く一つのシーンが、抑えられない感涙でかすんだ。

日本はこの映画を通してコルチャックに出逢った。彼の子どもという人間に対する探究の態度や思想はその後の研究で理解できたが、まちががなくその態度や思想の延長線上に彼の「最後の行進」(子どもたちと共に死に向かっていった)があり、ワイダ監督はそれを見事に描き切った。

この作品はそもそもはポーランドにおけるユダヤ人問題を主題とし、体制転換前からすでにその生

涯を映画化する構想があり、ワイダ監督がその意志を継ぎ実現したという(新保庄三『コルチャック先生と子どもたち』1996)。脚本をA・ホランドに委ね、コルチャックの『ゲッター日記』を中心に史実の再現を試み、彼の有名な発言が随所に織り込まれている。

次の場面が強く印象に残っている——孤児院のリーダー格の少年が恋するポーランド人少女との間を引き裂かれ、他方ゲッターの中で母親と死に別れたもう一人の少年と喧嘩騒ぎになる。「ユダヤ人なんていやだ!! 死にたい」と頭をかきむしる少年にコルチャックが、子どもにも死に対する権利があると語りかけ「君は人間だ」と勇気づける——このシーンをぜひ再度注目されたい。コルチャックとワイダの記憶すべきメッセージである。
(つかもと ちひろ)

新作能「鎮魂」を観て

霜田 千代麿

「鎮魂」は東日本大震災の後、2012年3月5日「シアターX(カイ)」に於いて朗読の形で発表され、以来5年の時を経て、2016年11月、ポーランド公演に続いて、14日東京・国立能楽堂に於いて日本・ポーランド国際共同企画公演・新作能「鎮魂」—アウシュヴィッツ・フクシマの能として上演された(ヤドヴィガ[イガ]・ロドヴィッチ作、観世鍔之丞節付・作舞、笠井賢一演出)。

当日は天皇皇后両陛下も観劇された。2002年、両陛下がポーランドを訪問された折、通訳を務めたのがイガ・ロドヴィッチ氏である。また、本作の中には、2012年の歌会始に両陛下の詠まれた津波への鎮魂の和歌「津波来し時の岸边は如何なりしと見下ろす海は青く静まる」(天皇陛下)と「帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず」(皇后陛下)が取り入れられ、創作の重要なモチーフとなっている。

自分は、本会の朗読会「午後のポエジア」(第62回例会、2012.6.16)で、イガの許可をえて「鎮魂」を朗読した事がある。その時は第一稿で、スッキリした作品であると、深く感じ入った事を覚えている。聞くと、今回は第五稿という事であった。

ここで自分なりの了解を述べると、「能」とは「タマシズメ」である。登場者(死者)も観客(生者)も、という事である。仏教とは特に深い関係がある。それと、他の演劇とは異なり「俳句」と同じ「省略」が日本文化の精神として大変重要な意味を持つ。

作品では、アウシュヴィッツ強制収容所で拷問のすえ非業の死をとげたアチュウ青年(後シテ、ロドヴィ

ッチ氏の叔父)と、東日本大震災の津波で流されたフクシマの少年(ツレ[福島から来た日本人]の息子)が重要な二本柱となっている。



(左) 霜田英麿、遠藤郁子
イガ・ロドヴィッチ、筆者

さらに今回は加筆して、アウシュヴィッツ強制収容所博物館で20年間働き、5万人の日本人を案内してきた日本人が登場する(アイ)。彼は日本人がなぜこの博物館でガイドをするのかと自問して「記憶の場と呼ばれるアウシュヴィッツ博物館は、歴史と真実との出会いの場。フクシマとナガサキ、ヒロシマも同じ人類の負の遺産なのです。アウシュヴィッツと同じように記憶され、何故(なにゆえ)と問い、立ち止まり、そこから現代についても考えなければならぬのです」と語る。

最後に、観劇者としての素朴な感想を述べさせていただく事が許されるなら、(一)演目が長すぎる、(二)台本が未整理で、説明が多すぎる、(三)能の一番大切な時空を越えた省略がきいていない、などを挙げたい。お能とは異界からの使者たちが現れる場であり、使者たちの登場自体がメッセージ(伝言)であるから、セリフで全てを語らせる必要はない。

とは言え、ポーランドと日本の大きなテーマを新作能「鎮魂」として完成し、本格能として日本の能舞台で上演された関係者一人一人のご努力に、心からの敬意と賞賛の拍手を送ります。

(しもだ ちよまる、元グロトフスキ実験劇場研究生)

《新会員のひと言》

はじめまして、西村範子です。

このたび入会させていただいた西村範子と申します。大学では音楽(ピアノ)を勉強し、現在も指導や演奏など、ピアノに携わる仕事をしております。



ポーランドは作曲家ショパンやシマノフスキたちの祖国で、歴史的にも多くの出来事が起こった大変興味深い国です。残念ながら、まだ訪れたことはありませんが、数年前に知人のポーランド人一家と交流し、たくさん話を聞き、改めてポーランドへの興味が湧きました。美しい町並み、でもその背後に辛い歴史をたどってきたポーランド。その国の歴史や音楽、文化について深く知りたい、学びたいという想いから入会致しました。

ピアノを演奏するものにとって、ショパンはやはり特別な存在です。多くのはかなく美しい作品について、語り合ったり、深め合ったりできたら、と会への期待も膨らんでおります。これから皆様のお仲間に入れていただけることを、うれしく思っております。どうぞよろしくお願ひ致します！ (にしむら のりこ)

安藤瞬と申します。

今から 22 年前、10 ヶ月という短期間ですが、家族でポーランドに住みました。当時は社会主義から民主主義へ移行して数年目の過渡期でしたが、社会主義にしる、民主主義にしる、自分にとっては初めての海外生活で、いま振り返ると、MacDonald's にテリヤキバーガーが無いことから始まって、背負ってきた歴史が刻まれた街並の違い、それに対する人々の認識の違いまで、世界の多様性を感じとった時期でした。



日本に戻って 22 年たち、もう一度ポーランドへ行ってみたいとときどき思いながらも、今は東京に住みポーランドとは物理的にも精神的にも遠い環境にいました。最近、父母がポーランド文化協会の東京例会などのイベントに誘ってくれるようになり、約 20 年後のポーランドの情報に触れて、変わったなと思う事も、変わらないなと思う事もありますが、やはり自分の年齢の変化による、違った見え方、感じ方を実感する機会となりました。

このたび入会させて頂くことは、自分の中で大切なポーランドの情報を更新できる貴重な機会です。どのように皆様に貢献出来るかまだ分かりませんが、今後とも宜しくお願ひ致します。(あんどう しゅん)

李政美の歌声を聴いて

長屋 のり子

9 月 22 日、中島公園の豊平館(ほうへいかん)という美しい佇まいの歴史的建造物の荘厳なホールで「李政美」(イ・ジョンミ)を聴いた。二時間半、休憩を取らずに政美は歌いつづけた。何年ぶりか聴く生の政美！このたびのコンサートでも政美の声は存分に羽を広げてホールの天井に飛翔した。政美の歌声に出会うたび、私の身体の中のどこかが強く触発されて蠢(うご)めきたつ。そのたび私達の何かをひらかせてくれる声。誘うように、問いかけるように私達にやってくる声。比類なく美しく澄んだ響きを伴って私を揺さぶる。余韻がいまだ胸で揺れている。



十数年を遡って、私は東京の電通ホールで李政美に出会った。早世した兄、山尾三省(詩人)の一周忌の集いに、兄の詩を歌う真理ヨシコさんと李政美が招かれた。真理ヨシコさんの「水が流れている」も清冽な希望を響かせて素晴しかったが、政美の「祈り」は記憶の闇から光の方へ聴衆の魂をたぐり寄せるように歌いあげて鮮烈だった。その日から私は政美に魅せられつづけている。

政美は在日二世の韓国人である。歌と歌の間のトークに「そのこと」が少しさし挟まれる。それは私達に歴史認識や想像力が試される痛点だ。促すように問いただすように「そのこと」がやってくる。その胸の痛みに手をおきながら、私達は聴く。政美の強くたおやかに繊細なそして透きとおる声を聴く。会場を席捲したアラン。

ポーランドのシャンソン＝パルチザンの歌「今日は帰れない」も丹念に、そして誠実にその切ない思いが歌われた。舞台の中央にすっと美しく屹立して、帰って来られなかった兵士達の無念の思いを、憑依したように政美は歌いあげた。残忍に他国に蹂躪されながら、歌に生まれ、歌に育った民族の逞しい歌声。あの夜、政美の歌声の私達に注いだものは「愛への祈り」「平和への祈り」だと気づく。

政美は私に口癖のように言いつづける。「祈るのは私のすることではない。私は歌うしかない。歌いつづける。死者にも、生者にも私の歌声を届けたい。ただひたすら誰かの心に思いを届けたい。」

李政美札幌・小樽公演の実現に力を貸して下さった北海道ポーランド文化協会の皆様へ、李政美共々、深く感謝してやまない。(ながや のりこ)

日本で働いた経験から

ミハウ・マズル **Michał Mazur**

こんにちは！ミハウです。ポーランド南部にある古都クラクフの出身です。私の家族は音楽一家で、父はジャズミュージシャンです。高校まで音楽学校に通いましたが、ほかにもいろいろ関心があって、父の跡は追わず、自分の途に進むことにしました。自分は言語学習と教育やコンピュータサイエンスに興味があったのです。それと、もう何年もパートタイムのジャーナリストの仕事もしています。

私はクラクフ教育大学でポーランド語と文学を修めました。2009年に文部科学省の奨学金で来日し、まず小樽商科大学で認知心理学を学び、2011年に北大の情報科学研究科博士課程に入学しました。主専攻は自然言語処理で第二言語修得のためのe-ラーニングテクノロジーを研究しました。

北大に移ってからは奨学金が無かったので、経済的支援無しに日本で暮らす方法を学びました。仕事を見つけて自立するため、まず日本語能力を磨く必要がありました。大変でしたが、数年を経て、奨学金無しの生活にも多くの利点があると思っています。できるだけ行動的になり、たえず新しいチャンスを探し、新たな人脈を作る必要がありました。お金を節約することを学び、奨学金のある多くの留学生よりも深く日本を体験することができました。

間違いなく、教えることはもっとも良い経験のひとつです。私は3歳から82歳までさまざまな地元の市民に英語を教えてきました。それはいろいろな世代の日本人の人々を知り、日本人について興味深い多くのことを学ぶ最上の方法でした。北海道科学大学や北海学園大学で非常勤講師もしました。ときどき日本人学生にポーランド語を教えることもあります。彼らは私の国の言葉や文化に驚くほど関心があるのです。教える仕事のほか、偽の教会で偽の結婚式を司る偽の司祭というとても愉快的な経験もあります。ある画家グループのモデルをしたり、ショッピングセンターや幼稚園でサンタさんを務めたこともあります。

ドクターコースの間いろいろな組織で働きましたが、いちばん思い出深いのは北大生協、特に留学生委員会の仕事です。日本人の働き方についてたくさん学び、日本の会社を内側からみることができました。北大代表として全国留学生委員会に参加し、2年間で全国を旅し沖縄、京都、東京、大阪

などをみる機会がありました。札幌地域のさまざまな国際交流イベントに参加し、自分の国の歴史、食べ物、言葉、伝統についてたくさん話しました。

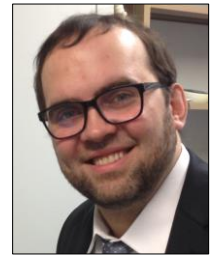
大学院を終えてから、北大高等教育研修センターの学術研究員になりました。これは今まででいちばん良い職のひとつです。海外旅行のチャンスもあり、素晴らしい人々と一緒に働けるのです。大学の教職員のためにセンターが主催するさまざまなイベントに参加し、いろいろ新しいことを学べるので、これは本当に素晴らしい仕事です。新しいスキルを発展させられる仕事は、いつでもベストの選択です。それに、大学院を終えたあと教職員の視点から大学について学ぶのはとても興味深いことです。

まとめると、私の日本での生活はとてもエキサイティングで、将来役に立つ多くのことを学べたと思います。私のキャリアが来年どうなるかまだ分かりませんが、もっと長く日本で暮らしたいです。大学院を出てまだ数ヶ月ですから、社会人としてもっと経験を積みたいと思います。自由な時間には、私の日本での学生生活について本を書きポーランドで出版し、若い人たちに日本の生活と学びについて私の経験を伝えて参考にしてもらいたいという、秘かなプランを温めています。それによって、より多くのポーランド人が日本に来て教育を受けることに興味を持ったらいいいと思います。

日本のみなさんすべてに、いつも親切にしてくださる、こうした経験すべての機会を与えていただき、心から感謝しています！将来は、ポーランドと日本との関係がますます良くなるように、ベストを尽くしたいと思います。

北海道ポーランド文化協会のことは、ずいぶん前から聞いていました。「ポーランドの友」が北海道地区にこんなにたくさんおられることを知ってほんとうに驚きました。「午後のポエジア」をはじめ協会主催のイベントにはよく参加させていただいています。両国の絆を強めるための協会の活動すべてにいつも感謝しています。

(訳 安藤厚)



ポーリッシュ・ポタリーショップ 2016

クリスマス市で賑わうテレビ塔の真下、札幌で写真家として活躍されているアグニェシュカ・ポヒワ(アガ)さんが出店されている、ボレスワヴィエツ陶器の並ぶポーリッシュ・ポタリーショップにはたくさんの人が足を留めていた。日本の食器には考えられないほど、なぜこんなにもカラフルなのでしょうかと尋ねると、アガさんは「遊び心です」と一言。

ではあまり実用的ではないのかと思うと、電子レンジ、オーブン、冷凍なんでも OK と、いろいろ説明を聞くうちにイメージーションが膨らんで、私もビールジョッキは止めに、かわいい蓋つきのバターケースを購入、お惣菜などを入れてチンして今

晩からお酒の時間の楽しみが増えました。

いつもは素通りの冬の大通り公園…澄み切った空気感と眩しいイルミネーション…私たちはなんと美しい街に住んでいるのだろう…そしてポーリッシュ・ポタリーショップ…白一色の札幌の街に求められる艶やかさがここにはある。(写真と文 松山敏)



誓います / Przysięgam～日本とポーランドの結婚式について (4)

アグニェシュカ・ポヒワ Agnieszka Pochyła

皆さま、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈りします。ウェディングシリーズの続きです。今回は衣装についてお話ししたいと思います。

ポーランドでは、基本的には新郎はスーツ、新婦はドレスを着ます。スーツは黒系でシンプルな物で燕尾服はめったに見かけません。新郎の仕事が警察官、軍人、消防士などなら、制服を当日の晴れ着として着ることがあります。フォークロアが盛んな地域では、民族衣装を着る新郎新婦もいます。

ウェディングドレスは白で、近年はすらっとシンプルかつエレガントな物が主流。長さは自由ですが、やはり長いドレスが多いようです。ただ、ダンスもできるように引きずらないスカート丈がポイント。ヴェールはあっても髪飾り扱いのようなもので、顔を隠す(ヴェールドアウン)ためではありません。

ポーランドの結婚パーティーは長いと夜中、たまに朝まで続くことが多いですが、お色直しという定番イベントはありません。最初から最後まで同じ服で過ごす花嫁もいれば、日付が変われば好きなタイミングでパーティードレスに着替える花嫁もいます。ただ、日本のカラードレスのようなものではなく、踊りやすい、短めの(膝丈が多い)シンプルなドレスを着ます。新郎のお色直しは暑くなったらジャケットを脱ぐぐらいですね(笑)。

昔はドレスもスーツも買

って、数年間ワードローブの中で眠ったドレスを売るか捨てるかが当たり前でしたが、近年は、ドレスはレンタルサロンで借りることが多くなってきました。ネット販売で中古の物を買うという選択肢もありますが、その場合は必ず実物を見て試着するのが常識です。新郎のスーツは未だに自分の物を買うのがほとんど。様々なイベントに使いまわしできるからです。

日本の場合、ドレスがどんどん主流になってきましたが、和装という選択肢もあります。ここで同じ日に様々なスタイルを組み合わせることを可能にするのが、お色直しの役目。和装からドレス、または白いドレスからカラードレスに着替え、自分もゲストも楽しませる演出です。ポーランドではめったに見かけませんが、日本ではふわふわの、お姫様ドレスが人気です。特にお色直し用のカラードレスはディズニーのプリンセスを思わせるような豪華な物が多いですね。ただ自由に動くことが非常に難しく介添えのお手伝いが必須になります。

日本では花嫁だけではなく新郎の衣装にも力を入れています。燕尾服が主流で、色は黒以外もよく見られます。白色・灰色から派手な柄の入ったお色直し用の面白いものまで選択肢はポーランドの花婿より豊富です。

結婚衣装はホテルに入っている衣装サロン、またはそれぞれの会場を担当する衣装屋からレンタルできます。新郎新婦の衣装はもちろん、和服なら二人の両親の服装まで借りることがあります。靴や小物もすべて同じお店でセットとしてレンタルできるので効率的ですね。もちろん衣装プランもそれな



りに高くなります。ポーランドではドレスだけ借りて、小物をネットかお店で買い揃えることが多いです。面倒でも、友達と一緒にに行けば楽しくショッピングできるし、買った小物を記念として長く楽しめます。

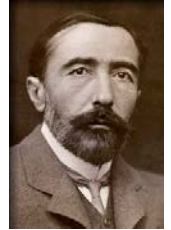
まとめると、衣装探しに関してはポーランドのほうがレグワークを要するが安く上がり、衣装も長時

間着るので日本のドレスと比べると動きやすくて疲れません。人生に一回だけでもお姫様気分になりたいのなら日本のドレスの魅力がわかります。価格の安さを求めることはできませんが、一カ所で効率的に衣装を揃えられるのは楽ですね。

NHK《ラジオ深夜便》より

イギリス文学に貢献したポーランド人 コンラッド

岡崎 恒夫



皆さんはジョーゼフ・コンラッドという作家をご存じでしょうか。文学事典では英国の作家として紹介されています。特に海洋文学を得意とし、英文学史の中でもその分野では傑出した作家です。

彼の『闇の奥』(1899)という作品に注目したフランス・コッポラ監督が映画化して世界的な評判を得た『地獄の黙示録』(1979)という映画をご覧になった方も多いでしょう。極度の孤独と寂寥はいかに人間性を荒廃させるかという主題の権化を見事に演じたマーロン・ブランドを覚えていらっしゃる方もあると思います。映画の舞台はベトナムになっていますが、本ではコンゴでの出来事です。



今日はその作家ジョーゼフ・コンラッド(1857-1924)をご紹介します。彼は正にポーランド生まれのポーランド人で、最後までポーランド人であることに誇りを持ち、遺言で、カンタベリー墓地にある墓碑にはポーランド名がポーランド語で記されています。本名はテオドル・ユゼフ・コンラット・コジェニョフスキ、外国人に妙な発音で呼ばれないために苗字以外の名前を二つとって英国名としたのです。

ではどうしてポーランド人のコンラッドが英語で書いた文学が、英国人がこれ以上に豊かな表現を持つ英語はないと言い切り、英語(いわば国語)の教科書にもっとも重要な模範英語として採り入れられているのでしょうか。その謎を解くには彼の生い立ちから見ていくほかありません。

コンラッドは 1857 年(日本ではペリー提督来航の頃)にポーランドの没落した貴族(シュラフタ)の息子として生まれました。父親はロシア占領下でポーランド独立運動に参加し息子が 5 歳のときに流刑になり、一家も父親を追って北ロシア・ヴォログダに移住しました。そこで母親が結核で亡くなり、4 年後に父親も死亡したため、彼はクラクフのおじさんに引き取られました。

寂しさを紛らわせるため、文学研究者だった父親の残した蔵書を片っ端から読破したコンラッド少年は海洋文学に目覚め、海にあこがれて 1873 年 16 歳で故国を脱出しフランス船の船員になりました。

5 年間フランス船で世界中を航海したあと、1878 年(日本の西南戦争のころ)イギリス船に移り、船員との会話で初めて英語を学んだのです。その間世界各地を航海して見たり体験したりしたことが、後の彼の作品の素地となりました。没落したとはいえ当時のポーランド貴族の間ではフランス語、ドイツ語が公に使われ、北ロシアではロシア語を習得したことが彼の文学に幅広さと深さを植えました。

こうして大人になってから英語を学び、38 歳(1895)でやっと作家デビューを果たしたのです。すでに数ヶ国語をものにしていたコンラッドは、よほど英語が性に合ったらしく「もし英語で書いていなかったら、私は何も書いていなかっただろう」と言っています。英国船上で、後のノーベル賞作家ジョン・ゴールズワージー(1867-1933)や、『宝島』(1883)の作者ルイス・スティーヴンソン(1850-94)と知り合い、彼らとの付き合いは生涯続きました。

コンラッドゆかりの場所としては、ワルシャワの目抜き通り Nowy Świat 47 に旧居が残っています(写真上、この建物のオーナーはショパンの妹で、ショパンの父親がここで亡くなりました)。またザコパネには彼が晩年滞在したヴィッラ・コンスタンティヌスが残っています(写真下)。

(おかげさ つねお)

photo 上 Mateusz Opasiński
下 Maciej Szczepańczyk



《奥の細道》の旅

出羽三山と象潟～鶴岡から山のふもとへバスは向い…

アグニエシカ・ジュワフスカ梅田

題句

けふはかり人も年よれ初時雨 芭蕉
 (五吟歌仙の立句、赤坂・彦根藩邸にて、元禄 5
 (1692)年 10 月 3 日)
 第二句には弟子の森川許六(きょりく、1656-
 1715)が参加している。
 野は仕付たる麥のあら土 許六
 (『許六全集』、東京:博文館、1898、15 ページ)

2016年8月、台風の湿気と暑さが数日おきに日本を総なめにしました。でも、しばしば孤独な放浪のときには、それは多くの満足をもたらします。それは自然や、歴史という時間の経過の痕跡や、自分の弱さ、老齡、自分自身と神の発見に結びついていきます。台風の雨、狭くて食事のつかない旅館といった旅の不便さや、同じような旅人との出会いはとても貴重な経験でした。

鶴岡(山形県)から羽黒山のふもとへとバスは向います。山全体が神社で、その入り口に随神門があります。低い門が鬱蒼とした杉の木々に囲まれ、道を外れれば静寂に浸ることができます。最近によく熊や猪が出るため、観光客は多くありません。怖い、怖い。そこから出羽三山の他の二山、月山と湯殿山へ道が通じています。出羽三山は山伏の重要な巡礼地です。山伏とは、生命力や、大地と自然との精神的な絆を見いだす修験者です。

羽黒山の頂上からバスで月山の八合目まで到達できます。そこには弥陀ヶ原という、樹木のない、大小さまざまな池と高山植物の花でいっぱいの高原が広がっています。緑濃い草原にウグイスの「ホーホケキョ」(法、法華経)というさえずりが聞こえ、高山地帯に薄い霧がたなびき、創造主の手の完全な豊かさが開けています。私は白く濁った霧に包まれている駐車場まで降りて行き、間もなく午後 4 時の最終バスが出ます。帰りは路肩の崩れかけた崖



の間をいく危険な道で、バスの運転手はカーブではアクセルを離し、直線ではリズムよくスピードを出して神業のように運転します。



Agnieszka Żuławska-Umeda

ポーランドにおける日本語教育の草分け梅田良忠(1900-61)教授の長男で社会活動家の芳穂(1949-2012)の妻。1973年ワルシャワ大学卒、1987年から同大学東洋学部日本学科講師、2004年文学博士。著書『1684-1694年代の蕉門の詩学』(2008)、訳書『俳句』(1983)、松尾芭蕉『笈の小文』(1994)などのほか論文多数。2016年9月に退職後もポーランドの「葛」句会及び、芭蕉の紀行文や『枕草子』の翻訳と日本詩文の研究を継続。

「出羽三山(六月)八日、月山に登る。木綿(ゆう)しめを身に引き掛け、宝冠で頭を包み、強力(ごうりき)という者に案内されて、雲や霧のたちこめる山気の中を、氷雪を踏んで登ること八里、身はさながら日月の運行する雲の関にはいつて行くかと怪しまれ、息も絶えだえに身もごこえきって、ようやく頂上に達すると、おりから日は沈み月が現れた。山小屋に笹を敷き篠(しの)を枕(まくら)として、横になって夜の明けるのを待つ。

涼しさやほの三日月(みかづき)の羽黒山
 雲の峰いくつ崩れて月の山
 (松尾芭蕉『おくのほそ道』現代語訳、頼原退蔵、尾形
 仿訳注、角川ソフィア文庫、2003、120-121 ページ)

秋田・国際教養大学の森久子夫妻の車で象潟の町に向くと、奈曾川にかかる橋を渡らねばなりません。駅の正面玄関の前に芭蕉記念碑が建っていて、芭蕉が泊まった蚶満寺(干満珠寺)が見えます。文化元(1804)年の大地震以前は、小富士として知られる鳥海山の北西山麓の地域全体が海でした! 絵のように美しい九十九島は松島の風景に似て、島には円仁(慈覚大師、794-864)の開創と伝えられる蚶満寺が建っています。象潟は放浪の詩人たちの目指した地、西行法師(1118-90)や俳人芭蕉(1644-94)、後には世界への感度満点の俳句の巨匠、小林一茶(1763-1824)らが魅了された場所です。今、昔の島の周りには稲田の海が広がり、昔と同じく松



の木の生い茂った島が田んぼの上に過去を封印して突き出ています。この場所の精神について、芭蕉の言葉は予言のように聞こえます—巨大地震と苦しみの時が大地と人に触れ、人々は死に、山は崩れ、大地は広がり、この奇妙な象の入り江のように、すべてを、海さえも飲み込む……

「象潟 これまで山水海陸の美景のある限りをことごとく見集めてきて、今や象潟(きさがた)に対して詩心を苦しめ悩ます次第となった。酒田の港から東北の方へ、山を越え、磯を伝い、砂浜を踏んで、その間十里、日もようやく傾きかけるころ、着いて見ると、汐風が砂を吹き上げ、雨は朦朧(もうろう)とうちけぶって、鳥海の山も隠れてしまっている。古詩に詠ずるごとく、暗やみの中を手さぐりをするようにして透かし見る眼前の雨中の夜景も「雨もまた奇なり」の詩句の通り、こんなにもすばらしいとすれば、さらに雨の晴れたあとの「晴れて偏(ひと)へに好し」というけしきはどんなにめざましかろうと期待をかけて、わずかに膝(ひざ)を入れるばかりの小さな漁師のあばら屋に宿って、雨のあがるのを待つ。

その翌朝、天気はからりと晴れあがって、朝日ははなやかにさし出るところ、象潟に舟を浮かべた。まっ先に能因島(のういんじま)に舟を漕ぎ寄せて、能因法師が三年間隠栖(いんせい)した遺跡を尋ね、向こうの岸に舟をあがると、「花の上漕ぐ海士(あま)の釣舟(つりぶね)」とおよみになった桜の老木が、今もそのまま西行法師の記念を残している。水辺に御陵があり、神功(じんぐう)

皇后の御墓という。また、この寺を干満珠寺といっている。だが、ここに皇后が行幸された



ことは、まだ聞いたことがない。どういいうわれのあることだろうか。この寺の表座敷に坐ってすだれを巻き上げてながめると、象潟の風景はことごとく一望のうちに見わたされ、南には鳥海山が天を支えるかのごとく高くそびえ立ち、その影が映って水上に横たわっている。西はむやむやの関が道をさえぎってその先は見えず、東には堤を築いて秋田に通う道がはるかに続いており、海を北にひかえて外海の波が潟にうち入る所を汐越と呼んでいる。入江の縦横各一里ばかり、そのおもざしは松島に似通っていて、しかしまた違ったところがある。いわば松島は笑っているような明るさがあり、象潟は憂いに沈んでいるかのような感じだ。さらにいえば、寂しさの上に悲しみの感を加えて、その地のたたずまいは傷心の美女の俤(おもかげ)に似ている。

象潟や雨に西施(せいし)がねぶの花
汐越や鶴脛(つるはぎ)ぬれて海涼し
(『おくのほそ道』125-126 ページ) (訳 安藤厚)

写真 1 羽黒山随神門 (羽黒町観光協会 HP より)

写真 2 月山弥陀ヶ原湿原 (photo: Kagioka Ryumon)

写真 3 象潟 稲田の海に浮かぶ松の木が生い茂った島

ワイダ監督と猿八座

佐渡島からやって来た文弥人形の猿八座に翻訳と通訳を頼まれた 2004 年のこと。ポズナンとヴァウブジフに続き、クラクフの日本美術技術センター“マンガ”で『信太妻』の公演が行われた際に、ワイダ監督と出会うことができました。僅かな間でしたが、十一月の寒い日に監督も交えて一座の皆と温かい一時を過ごせたことは、貴重な思い出となりました。

polskie zaduszki
słyszeć szepty modlitwy
ktoś gra na trąbce
Monika Tsuda, Poznań

ささやきと
トランペットの
祈る墓地
ポズナン市、津田モニカ

w gaju nad rzeką
jeź poranek ogląda
spod złotych liści

黄葉の
朝を見回る
針鼠

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ



ポーランド&ニッポン歳時記



冬うららプレゼントはジョーカーか
無一物ともいかず冬用意かな
ビビビと増毛の海の鎌鼬
鎌鼬(カマイタチ。寒風などにあたって皮膚が鎌で切られた様に傷つくことをいう。冬の季語)

岩見沢市、霜田千代磨

タデウシュ・ルジェーヴィチ

しゅうとめ

姑にささげる讃歌

栗原 成郎 訳

詩人たちは 乙女への恋歌を
 インクの海を使い果たして書いたものだ。
 ときにはガチョウのようだ、とうたい、
 ときには春に生まれた仔牛のようだ、とうたって。

己の妻と他人様の妻は みな
 言葉の絹の綾織りにくるまれてうたわれた
 しかしどんな歌人も 乙女の母親である人の
 つまり 姑の
 誉め歌をうたった例はない。

それはぼくらに 暁星を与えてくれた女だ
 おお アポロの息子らよ
 かの女はそれを目に入れても痛くないほど 可愛が
 ってくれる。

かの女は僕らの狂おしい愛の
 果実を大切に育ててくれる
 夜は 根気よく起きて
 おむつを替え、おむつを替え、おむつを替える。

かの女は リンゴ入りの鴨を焼き
 ひき肉詰め 鯉料理を作り
 下着を洗濯し
 ソックスの破れを繕い
 シャツにボタンを取り付ける
 春になれば 家の塗装の傷みを点検し
 絨毯をたたき マットレスに風を当てる
 かの女の細々した家事は やればいろいろ限が無い。

秋になれば ジャムを作り、キャベツを塩漬けにする
 雪が降り 寒波で凍てついた空気がきしむ頃になると
 孫のためにリンゴを箆筒の中に見つけてやる
 ときおり恐ろしげで陰鬱な黒雲が
 かの女の顔をよぎることがある
 しかし澄み渡った空でさえ かの女の表情を曇らせ
 ることがある

見ていたまえ かの女の白髪頭を
 一本一本の髪の毛が 一日に一滴の涙となる
 それは春秋を重ねる度ごとに。

かの女は用心深く気を配る
 家のかまどの火が消えないように番をする
 夜の亡霊どもを箆で追い払う必要がある時は
 かの女は家の目となり耳となる
 家風の掟と務めの番人として立ち
 まだ生まれてこない赤ん坊のためにおしめを作る
 日常の実生活の使者である。

去勢された男どもの戯れ歌から
 引用したあらゆるばかげたジョークに対して
 婿たちが 酒を飲む時にふざけて
 言う冗談(「独り者を祝して乾杯」)に対して――

姑に謝罪せよ
 家のかまどのそばに立ち
 暖をとろうとして
 火に手をかざす老女に赦しを乞え。

愚かな馬どもよ 地面に土下座せよ
 かの尊敬すべき名の
 響きに応じて 嘶け
 そして人間の声で言うがよい
 「かあさん おれたちの所へ来てください」と。

詩集『ほほえみ *Uśmiechy*』(1955)より

Tadeusz Rózewicz (1921–2014)
<http://voiceseducation.org/content/tadeusz-r%C3%B3zewicz-polish>

佐佐木信綱と W・シェロシェフスキの「愛国」の友情

(読売新聞記事の翻刻)

井上 絃一

解題

今は亡き吉上昭三さんは1987年、「[ヴァツフ・]シェロシェフスキは[1903年]9月中旬、青森から汽車に乗り、東京、大阪、神戸をへて長崎へ向かった。[...]その後彼は朝鮮半島から中国へ向い、天津、北京、上海を訪れる。揚子江上の船で歌人の佐佐木信綱[1872-1963]と知り合い、交友を結ぶのはこの時である」[吉上 1987:87-88]と記した。とりわけ最後の件は座談でもよく語っておられたから、耳にされた方も多いであろう。今回、吉上さんがこの件で参照されたと想定される新聞記事を手にしたので、紹介の労を執りたいと思う。

シェロシェフスキ (Wacław Sieroszewski, 1858-1945) は作家・民族誌家として知られるが、国家再建後のポーランドでは宣伝相、作家同盟議長、文学アカデミー総裁まで務めた政治家でもある。若い頃は社会主義運動に挺身してヤクート地方への12年の流謫も体験した。シベリアから戻って4年後の1900年、アダム・ミツキェヴィチ生誕百年を期してワルシャワに建立された、銅像の除幕式へ向けた檄文の起草者との嫌疑で逮捕される。再度のシベリア勤めを回避するべくロシア帝室地理協会から提示されたのが北海道におけるアイヌ調査だった。サハリン島に滞在するブロニスワフ・ピウスツキ (Bronisław Piłsudski, 1866-1918) の参加を条件にこれを受諾すると、シベリア、満洲を経て初来日を果たす。彼は1903年4月初旬に大連から長崎へ入港して、9月末か10月初めに朝鮮へ向けて神戸を出港するので、日本滞在は半年にも及んだ[吉上 1987、井上 2003、2010、シェロシェフスキ 2013]。

1939年9月1日、ドイツ軍がポーランドへ電撃進攻して第二次世界大戦が勃発する。果敢な抵抗も空しくドイツの軍門に降ったポーランドは、再度の亡国を余儀なくされた。その頃、東京のポーランド大使館にはボレスワフ・シュチェシニャク (Bolesław Szczesniak, 1908-96) が勤務していた。彼はワルシャワの東洋学院で梅田良忠から日本語を学んだあと東京へ留学し(1937-42)、日本史専攻の大学院生として早稲田大学に在籍する傍ら大使館勤務と立教大学講師もこなし、立教大では本邦初のポー

ランド語とポーランド文化を講義した(1939-42) [Dąbrowski 2000:101-102]。

1940年1月23日、読売新聞が本記事を報じると、彼は早速それを切り抜いて保存した。スクラップ記事は持主とともに英国を経て渡米(1948)、長らくインディアナ州ノートルダム大学にあったが、今はワルシャワの国立近現代文書館 (Archiwum Akt Nowych、以下 AAN と略記) に収蔵されている。

私はこれをワルシャワ在住の旧友井上久仁子さんから頂戴した。彼女には AAN でシュチェシニャク旧蔵資料を調べてもらっていたが、作業中の掘出し物として画像が届けられたので興味の赴くまま翻刻を試みた。以下に収録するのはその翻刻稿である。なお同資料には、記事に掲載された佐佐木信綱ほか2名のスナップと、寄書きされた絵葉書の写真も別途保存されている。恐らくシュチェシニャク本人が取材記者から入手したものであろう。

ところで AAN のシュチェシニャク旧蔵資料中には、東大の沼野充義さんのシュチェシニャク宛私信も5通(1984年8月17日、9月27日、11月20日、1985年4月9日、7月17日付)見出される。当時ハーヴァード大学に留学中の沼野さんは、シュチェシニャク氏が所蔵するブロニスワフ・ピウスツキ関係資料の拝借を願い出て(第2信)、その後も3度にわたり催促しておられる(帰国途上のジュネーブから送られた第5信には、東京の住所が記されていた)から、とどのつまりは借用が叶って複写できたものと推察される。もしそうであれば、そこに件の読売記事の存在は必至だから、吉上さんは同記事を沼野さんから提供されたのではあるまいか。

シェロシェフスキの「寄書」は、ミツキェヴィチの長篇叙事詩『パン・タデウシュ』の「第一之書」農園の冒頭部を若干潤色しており、Ojczyzno ukochana. Ty / jesteś jak zdrowie, / Ile Cię cenić trzeba, / ten się tylko dowie, / Kto Cię utracił. / (A. Mickiewicz, / „Pan Tadeusz” / Jang-Tsy / 26 List. 1903 r. / Wacław / Sieroszewski のように読める。執筆地と日付は「揚子[江]、1903年11月26日」。

ミツキエヴィチの原詩は以下の通り。

Litwo! Ojczyzna moja! ty jesteś jak zdrowie;
Ile cię trzeba cenić, ten tylko się dowie,
Kto cię stracił. [Dzisiaj piękność twą w całej ozdobie
Widzę i opisuję, bo tęsknię po tobie].

(Adam Mickiewicz, *Pan Tadeusz*, Paryż, 1834)

因みに、1999年に上梓された故工藤幸雄氏による本邦初の韻文訳では「リトヴァ！わが祖国！汝（なんじ）は健康にこそ似る / その価値をしみじみ知るのは、ただ / 健康を失った者のみ。[きょう華麗なる汝の美しさを / 目に浮かべ、わたしは描きだす、わが焦がれる汝（なれ）ゆえに。]」[ミツキエヴィチ 1999 (上):17]と邦訳されている。

去る10月9日に逝去されたアンジェイ・ワイダ監督も、異郷にあるミツキエヴィチが祖国での十一月蜂起敗北を受けてのものした畢生の大作、生前最後の長篇叙事詩を1999年に満を持して映像化された。工藤さんは訳者序で「図らずも、アンジェイ・ワイダ監督による映画『パン・タデウシュ』の完成と時を同じくする一九九九年に遅れ馳せながら、この訳書を世に問うことのできたのは、大きな喜びである。なぜなら、ポーランドにとって十九世紀のミツキエヴィチと、二十世紀のワイダとは、文学と映画と分野の違いこそあれ、芸術界の双璧と呼ぶべき巨匠だからだ」[ミツキエヴィチ 1999 (上):7-8]と述懐している。

本稿付載の写真3点はワルシャワのAAN所蔵 (Akta i zbiór Bolesława Szczeniaka, *sygn.* 1, 66 [記事], 67[スナップ], 68[絵葉書])、いずれも井上さんの仲介で入手できた。井上久仁子さんと国立近現代文書館にはこの場をお借りして感謝申し上げたい。

(いのうえ こういち)

参考文献

- Dąbrowski, Adam Grzegorz 2000 Przyczynki do biografii Bronisława Piłsudskiego w spuściznie Bolesława Szczeniaka, *Teki Archiwalne* (Seria nowa) 4(26):99-107
- 井上紘一 2003 B・ピウスツキと北海道—1903年のアイヌ調査を追跡する、井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11-31、北大スラブ研究センター
- Inoue, Koichi 2010 The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903, in: K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2: 3-37, Faculty of Liberal Arts, Saitama University
- ミツキエヴィチ 1999 (工藤幸雄訳)『パン・タデウシュ』上/下、講談社文芸文庫
- シエロシエフスキ、ヴァツワフ 2013 (井上紘一訳) 毛深い人たちの間で、井上編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事—白老における記念碑の除幕に寄せて』77-108、北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター
- 吉上昭三 1987 プロニスワフ・ピウスツキ、北海道以後—シエロシエフスキの記述を中心に、加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊5号)81-97

床し歌の信綱博士

卅八年前の熱情

敗戦波蘭の友に注ぐ*

わが歌壇の元老佐佐木信綱博士とポーランド文壇の老大家とに蘇つた若き日の友情——この佳話の発端はいまから卅八年の昔に溯る、明治卅六年の初冬南支周遊の旅にあつた佐佐木博士は揚子江を溯る船中で當時ポーランド獨立運動の

志士だつたワツラフ・シエロシエフスキ氏と邂逅、一週間の船中

生活に多感な歌人と志士は意氣全く投合して舊知の如く幾夜か語り明し再會の日を心に描いて別れた、そしてその後博士は

わが歌壇の大御所になり、シエロシエフスキ氏も獨立ポーランド

の文藝院總裁になつて茫々歲月が流れポーランドはまた亡國の悲哀をなめシエ氏の消息も硝煙のなかに杜絶えてしまつた、こ

ろが佐佐木博士が遙かに恙なきを祈つた心が通じたか、數日前

東京ポーランド大使館ヘルマニアのブカレストにある同國公使館から「シエ氏は無事當地へ避難した、日本の友佐佐木博士によろ

しく」と入電があつた、スタシニツク書記官が早速この報せを

博士へ齎すと博士は嬉しさに涙さへ浮かべて早速温かい慰問の

手紙を送るとともに廿日夜同書記官を

晩餐に招き初代駐波公使川上俊藏（正しくは俊彦）氏未亡人ときわ

さんを交へてシエ博士（ママ）の憶い出を語つてその無事を祝した

シエロシエフスキー氏は今年七十八の高齢、幾多の名著によつて知られる民族學者でありまた作家としても重きをなした、明治卅五年にはアイヌ研究のため北海道を訪れこの機会に日本文化への深い共感をもち『赤穂義士』『波から波へ』など日本に取材した名作を出してゐる

佐佐木博士との奇縁はこの訪日の歸途のこと、博士の家信の繪葉書にシエロシエフスキー氏がペンを執つて

「愛する祖国よ、汝は健康の如く、その價の幾何なるは、汝を失ひしものよみぞ知る」

と祖国の愛國詩人ミツキユウイチの詩の一節を書けば佐佐木博士は所持した白扇に

「大江の水いまだしきもときしあれば陸ひたす時なからめや」

とポーランド再興を暗示する和歌をしるして親しき友に與へ惜しき別れを告げたのだつた、本郷西片町の自邸で佐佐木博士は異郷の友の若き日の面影を偲びながら語つた

「あの頃のわたしは朝にも夕べにも愛國の歌ばかりを歌つてゐた時だから祖国回復の大志を抱いたシエロシエフスキー氏の情熱に燃える瞳はわたしの胸に喰入るやうに感じた、二人で寄書した繪葉書はいまもわたくしの筐底深く大切にしまつてゐる、とにかく無事で心の雲が晴れ渡つたやうに嬉しい」

*昭和十五年一月二十三日付『讀賣新聞』所載記事。典拠としたのは、ワルシャワの国立近現代文書館蔵B・シユチエニヤク旧蔵資料中に見出されたスクラップ記事である。

大使、副所長が離任。大感謝!!

このたびツイリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国大使=写真左・中左=と、ポーランド広報文化センターのマルタ・カルシ副所長=右・中=が任期を終えられました。

大使は着任早々、本会創立 25 周年祝賀会(2012.11.3)にお越しいただいて以来、北海道をこよなく愛し何度も来札され、プロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業(2013.10.19-20)や、2回にわたる東京例会などでたいへんお世話になりました。大使の送別会(2016.9.28、ポーランド大使館ホール)に出席して4年間のご厚誼に深く感謝申し上げます。

マルタさんには創立 25 周年記念コンサート(2012.5.12)や、第 2 回東京例会(遠藤郁子ピアノサイトル、2016.6.23)などでたいへんお世話になりましたので、センターの「ポーランド風忘年会」(2016.12.7)の機会に、7年にわたる任期中のお力添えに厚くお礼を申し上げます。(安藤厚)



Cyril Kozaczewski 前大使 / Marta Karsz 前副所長



寫眞 上は右から川上未亡人、佐佐木博士、スタシユニツク氏と(圓内)シエロシエフスキー氏
下はシエ氏と佐佐木博士合作のはがき



今後の予定

(共催)さっぽろ雪まつり・国際雪像コンクールに
カトヴィツェ市のチーム3人が参加、2017年2月5
日(日)～9日(木)、大通西11丁目国際広場

〇クラクフ市の日本美術技術博物館“マンガ”館
Manggha Museumの副館長らがプロニスワフ・ピ
ウスツキとアイヌ文化の展示会の準備のため来訪、
2017年2月4日(土)～9日(木)

入会・退会(ご芳名)(敬称略)(2016.9～12)

入会:安藤瞬、西村範子、吉田邦子、片倉昭良
退会:猪狩令子、山本弘子

ご寄付(維持会費)ありがとうございます(ご芳名)

(2016.8～12)前田理絵、松永吉史、松山敏(2)、
霜田千代麿(17)、富山信夫(2)、佐藤純一(2)、
山本伸一(2)、小笠原正明、小笠原昭子、安藤厚、
西村範子、川染雅嗣(2)、斎田道子(2)、霜田英麿(7)

※1口千円、()内は2口以上の口数、敬称略

今年度(2016.9～2017.8)会費納入のお願い

年会費(一般3千円、学生 1,500
円)と、維持会費(任意のご寄付1口
千円)の納入をお願いします。



【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

※ 未納分については、個別の納入お願い文書と振替
用紙を同封します。

広報文化センター新副所長

センターのポーランド風忘年会
(2016.12.7)では、新副所長マリ
ア・ジュラフスカ Maria Żurawska さ
んをご紹介いただきました。



目 次

第30回定例総会とお茶の会報告(小林暁子)、「わたしはテイコ」を読んで(熊谷敬子)	1
第30回定例総会議案	2
《第78回例会》レクチャーコンサート報告 加藤一郎先生を迎えて(松井亜樹)	3
ショパンとバロックの精神(加藤一郎)	4
《第79回例会》報告 アンジェイ・ワイダ監督を偲んで(園部真幸)、ワイダ監督のサイン(安藤瞬)	5
《ワイダ監督追悼特集》.....	5
(三浦洋:アンジェイ・ワイダ追悼、佐藤晃一:さようなら、ワイダ監督、園部真幸:灰とダイヤモンド～ 永遠の青春映画、松山敏:永遠の勝利の暁の幻影、中島洋:抵抗三部作は今も生きている、 津田晃岐:ワイダと演劇、塚本智宏:ワイダ監督の『コルチャック先生』)	
新作能「鎮魂」を観て(霜田千代麿)	9
《新会員のひと言》(安藤瞬、西村範子)、李政美(イ・ジョンミ)の歌声を聴いて(長屋のり子)	10
日本で働いた経験から(ミハウ・マズル)	11
ポーリッシュ・ポタリーショップ 2016(松山敏)	12
日本とポーランドの結婚式について(4)(アグニェシュカ・ポヒワ)	12
NHK《ラジオ深夜便》より イギリス文学に貢献したポーランド人 コンラッド(岡崎恒夫)	13
《奥の細道》の旅 出羽三山と象潟(アグニェシカ・ジュワフスカ梅田)	14
ポーランド&ニッポン歳時記(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)	15
ルジェーヴィチ「姑にささげる讃歌」(栗原成郎訳)	16
佐佐木信綱とW・シェロシェフスキの「愛国」の友情(井上紘一)	17
大使、副所長が離任。大感謝!! (安藤厚)	19

POLE

第90号 ポーレ編集委員会

熊谷敬子／越野剛／塚本智宏／松山敏／ラファウ・ジェプカ

2016年度 収支決算書 (自2015年10月1日～至2016年8月31日)

(単:円)

【収入の部】	予 算	決 算	備 考
会費	200,000	150,500	全額の56%(会計年度変更の影響)
寄付金	30,000	33,600	
雑収入	30	50,067	貯金利子、25周年記念誌助成金(前年度立替分)
小 計	230,030	234,167	
前期繰越金	370,527	370,527	ゆうちょ銀行355,266円+現金15,261円
合 計	600,557	604,694	
【支出の部】			
事業費	150,000	179,820	第29回総会・祝賀会9.4万、第74回<映画講演>1.6万、第75回<先住民民族講演>1.4万、第76回<ポエジア6>147円、第77回東京例会5万、第78回<レクチャーコンサート>6千
連絡費	70,000	36,569	ポーレ発送・はがき・切手他
編集費	30,000	13,200	ポーレ印刷費(87号)
会合費	20,000	22,866	運営委員会6回
事務費	25,000	25,826	用紙・文具・コピー代
雑費	1,000	4,622	ホームページサーバー、ドメイン他
予備費	304,557	0	
小 計	600,557	282,903	
次期繰越金	0	321,791	ゆうちょ銀行210,105円+現金111,686円
合 計	600,557	604,694	
演奏部会基金	【収入の部】	【支出の部】	備 考
前期繰越金	33,681		
映画班より	1,008		
利息(北洋銀行)	8		
合 計	34,697	0	次年度へ繰越
特別会計			
1 (雪像チーム)			
雪像チーム助成金	50,000	50,000	ポーランド大使館より/交通費・食費補助
2 (北大祭テント)			
北大祭テント助成金	50,000	50,000	ポーランド広報文化センターより/レンタル費用、テント登録費
3 (ポエジア6)			
ポエジア6経費		50,147	飲食費、広報費(ポーレ88・フライヤー印刷・発送)
一般会計より(調整額)	147		
ポエジア6助成金	50,000		ポーランド広報文化センターより
合 計	50,147	50,147	0

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2016年 10月 17日

北海道ポーランド文化協会 監査委員 齋田 道子 印

2017年度 会計予算書 (自2016年9月1日～至2017年8月31日)

【収入の部】	前年度決算	予 算	備 考
会 費	150,500	240,000	3千円×80人
寄付金	33,600	30,000	2016.9実績程度
雑収入	50,067	50	貯金利子等
小 計	234,167	270,050	
前年度繰越金	370,527	321,791	2016.9実績
合 計	604,694	591,841	
【支出の部】			
事業費	179,820	150,000	第30回総会3万、第78回例会5万、その他例会3.5万×2
連絡費	36,569	40,000	ポーレ発送、はがき・切手他(1.3万×3号)
編集費	13,200	40,000	ポーレ印刷費等(1.3万×3号)
会合費	22,866	25,000	運営委員会他(6回)
事務費	25,826	25,000	用紙、トナー、文具、コピー他(前年度実績)
雑費	4,622	5,000	ホームページサーバー、ドメイン他(前年度実績)
予備費	0	306,841	
小 計	282,903	591,841	
次年度繰越金	321,791	0	
合 計	604,694	591,841	